

『浅間嶽面影草紙』論——京伝読本との関係から——

本多 朱里

はじめに

柳亭種彦は山東京伝の作品から大きく影響を受けて読本処女作『近世怪談霜夜星』（文化五年）を著した。その後の読本作品にも京伝の影響は見られるのだろうか。また、それはどのような形であらわれているのだろうか。

『浅間嶽面影草紙』三巻三冊は文化六年、後編の『浅間嶽後編 逢州執着譚』五巻五冊は文化九年、ともに蘭齋北嵩画で江戸山崎平八より刊行された。本作は

世評は得たらしく、二、三種の後摺本を見る。（中略）後年抄訳と脚色を加えた末期長編合巻『風俗浅間嶽』（柳烟亭種久作、二世歌川国貞画）も作られ、さらに時鳥殺しと御所の五郎蔵の件りに主眼をおいて脚色した『曾我綉侠御所染（そがもようたてし）

こしよぞめ』（河竹黙阿弥作、元治元年（一八六四）二月江戸市村座）ならびに同題の正本写（勝彦彦録、二世国貞画、三編）もある

というように、^三当時ある程度の世評を得て後に対する影響も大きく、認められることの少ない種彦読本の中では現在においても比較的高い評価を得ているといえよう。また、種彦の読本作品のうち中期に書かれたものということからいって、処女作『霜夜星』に比すれば、はつきりとした構成意識をもって書かれていると考えられる。本稿では、この作品を取り上げて京伝作品との関係について考察したい。（以下『浅間嶽面影草紙』を『面影草紙』前編、『浅間嶽後編 逢州執着譚』を『面影草紙』後編と略す。また本作に関しては、巻号を省略し条のみを記す。）^三

一 『浅間嶽面影草紙』

『日本古典文学大辞典』に

歌舞伎戯曲『けいせい浅間嶽』に淵源派生した種々の「浅間物」中、最も行われた富本節の「其節（そのおもかげ）浅間嶽」を意識して書名とし「浅間物」通有の、傾城逢州靈魂出現や石橋の場を配し、演劇色ゆたかに仕上げた敵討物作品

という如く、⁽⁹⁾本作は「浅間物」演劇より趣向を得て作られた作品である。ここでまず、エピソードごとにまとめておきたい。

I 星影土右衛門の悪事による物語

星影土右衛門は、浅間家追放後に各地で「さまざまの姦悪」を行う「奸悪邪智の曲者」とされるが、作中で主に描かれる悪は五郎蔵とさつきに対するものと団一斎殺しである。

A 五郎蔵とさつき

前編第一で土右衛門はさつきに言い寄り遠山尼に追放されるが、同時に五郎蔵（角弥）とさつきの密通も露見し二人は追放となる。後編第五、六、七で土右衛門はさつきに再会し、彼女を自己のものにするために奸智をめぐらし、五郎蔵への縁切りの手紙をさつきに書かせる。心変わりを疑い、怒った五郎蔵はさつきを手にかけてようとし、誤って逢州を殺してしまう。そして罪を悔いた五

郎蔵と、夫を思うさつきはともに自害をする。五郎蔵とさつきの苦難、悲劇はすべて土右衛門を原因として起こっているのである。

B 団一斎殺し

前編第一で土右衛門は団一斎を殺害して金を奪う。それに対する敵討が、後編最後の第十で寄居虫と夫の小織之助らによって行われるが、彼らに五郎蔵夫婦の靈魂も付き添っている。本作は土右衛門の悪事にはじまり、それに対する仇討ちによって閉じられているといえよう。

II 団一斎遺児の物語

一斎殺害により、その二人の娘忘貝と寄居虫（実は「事のはじめ」でとりちがえられた木の瀬の娘）の苦難が始まる。前編第二で父を失った娘たちは、強盗にあい家財を奪われ、敵を捜して羽黒山へ赴き、貧苦と病に苦しみ、ついには姉の身売りとなるのだが、この二人を直接的に苦しめるのは父の敵の土右衛門ではなく一斎の甥の奈古平である。二人を苦難におとしいれた奈古平は前編第六で悪事が露見して一斎の忠僕切平に斬り殺される。つまり、この二人の娘の苦勞譚は、奈古平の死をもって、前編第二と第四・第六の間で解決するのである。勿論、忘貝は身を売って逢州となり、寄居虫は土右衛門への仇討に出るものの、この父の死による苦難の物語はここで一

応完結した形をとつており、一つの独立した挿話として入れられていると考えられる。

III 浅間巴之丞をめぐる物語

浅間巴之丞に關係する逢州と時鳥、つまり取り違えられて別々に育つたものの、実の姉妹である二人の女性を中心とした物語であるが、これが前編第五と第八、後編第一と第五と第八と第九というように本作の大半を占めている。

A 逢州譚

先掲の如く後編第九の逢州靈魂出現と石橋の場は「浅間物」より得たといわれる。また、後編の目次題の横には「一名 本朝長恨哥」と記されており、本文中巴之丞が逢州に対する思いを玄宗の楊貴妃寵愛になぞらえていることからわかるように、この巴之丞と逢州の恋愛譚は玄宗、楊貴妃の影を負っている。逢州は巴之丞に出会い（後編第一）、実の妹時鳥の霊と対面し（第二）、巴之丞に寵愛され（第五）、さつきと入れ替わつたために五郎蔵に誤つて殺される（第六）。この殺害という死の形は『其弟浅間嶽』の「そなたは人手にかかつて死にやつたと聞いた」というせりふをそのまま取り入れた「人手にかゝりて死しつると聞しゆゑ」（第九）という形を引き出すために設定されたと思われる。後に、霊となつ

て巴之丞のもとを訪れて清涼山の石橋にいざない、二人の因縁を語り、後々のことを託す（第九）が、この場の巴之丞と逢州のせりふも『其弟浅間嶽』に拠つたと思われる箇所が見受けられる。^(五)このように逢州譚は、『其弟浅間嶽』より逢州靈魂の場を得て、長恨歌の世界をもとりいれて描かれた恋愛譚といえよう。

B 時鳥譚

時鳥譚は巴之丞の本妻瞿麥との争いが描かれた物語である。巴之丞に出会い寵愛を受け、本妻の瞿麥によりいたぶられ、飲まされた毒薬の為に病になり顔が醜くなつてしまふ。解毒の方法を得て平癒したものの、それを知つた瞿麥に殺害された時鳥は、霊となつて姉の逢州と巴之丞に対面し、おそろしい怨霊として様々の怪異を起こし瞿麥を狂死させるが、最後に老僧の教化により成仏する（前編第五と第八、後編第二と第四、第九）。前編から後編にかけて、この時鳥譚が最も大きな部分を占めている。また、この話は「時鳥殺し」として『曾我綉侠御所染』に取り入れられ好評を得た。特に怨霊の出現の場は、泉鏡花が

例の「逢州執着譚」なぞを讀むと、瞿麥の方が琴を弾いて居ると、俄にその音が弱くなつて、ついに全く鳴らなくなるので、それを訝しむと、折柄天井に聲あつて、鳴るものか、この身を壓えて居るといふ

など、何となく凄愴の氣がある。そして怨霊が家の棟に居て鋸引きをするとあつて、天井から木屑がぱらぱら落ちて来るやら、有名な「幻ぎぬた」の音がするやら、讀んで居て何となく引入れられる。

と述べ、(二)坪内逍遙が

種彦が作に係る読本中の傑品にして、劇の時鳥殺し、御所の五郎蔵の原本なり。(中略)草雙紙にも改作せられ劇にも演ぜられ、今日まで持囃さるゝ名作なり。殊に怨霊の祟や亡魂の會合など惨愴たる光景を、種彦得意の凄艶なる筆にて敘せるあたり、鬼氣の人に通るを感じしむ。

といっているように、(三)はるか後年においても高く評価されているのである。

以上のように、本作は主に土右衛門に關係する五郎蔵夫婦の話と仇討話、巴之丞にまつわる逢州の話と時鳥の話、一斎遺児の挿話で組み立てられている。

構成に円滑さを欠くという批判もあるが、(四)やはり種彦の作品のなかでは出来がよいといえるのではないだろうか。様々な趣向に富み、処女作にくらべれば情景描写も細やかで美しい。「浅間物」に拠つたというだけでなく、割りせりふや掛け合いのせりふ、演劇的な趣向を用い、後編第六の「五郎蔵牡丹花と思ひたがへて逢州を

こゝろす」(二二ウ二三オ)という凶など挿絵にも演劇色の濃さはあらわれている。『近世物之本江戸作者部類』の「舊き義太夫本数十種を蔵奔して戯作のたねとし」(五)という言葉や、『柳亭日記』中に非常に多く見られる義太夫本を借りて讀んだという記述、(二〇)蔵書目録(二二)などから推察される種彦自身の演劇への強い興味も少なからず關係していよう。また、妻が加藤宇万伎の孫娘であり、自ら石川雅望に師事していたという背景を持つ種彦は古典への造詣も深く、本作にも『源氏物語』や『枕草子』を取り入れており、『万葉集』を中心に和歌も多く入れられている。後編第八の寄居虫と小織之助の挿絵(一八ウ一九オ)は、自ら明らかにしているように菱川師宣の『姿絵百人一首』により描かれており、(二二)和歌、絵画、江戸初期考証趣味という種彦の嗜好があらわれている。さらに、小野恭靖氏の論考(二二)により種彦作品の特徴の一つとされた小歌など歌謡記事の多さも、本作に確認できるのである。このように『面影草紙』は様々な趣向を凝らして意欲的に作られており、種彦の特徴や興味が明確にあらわれた作品といえるであろう。

二 京伝読本からの影響

『面影草紙』には京伝読本との趣向の一致がいくつか

見られる。以下、本作の該当箇所を『面影草紙』執筆以前に刊行された京伝作品と対照してゆく。

序文に田植歌を載せ

此田植歌は、浄瑠璃作者の祖小野の於通が作とて、洛東某寺に蔵する所なり。浄瑠璃にもとづき此物語を書けるより、思ひ出で、録して序とはなしぬ。

と説明している。小野恭靖氏は「この田植歌の記事は『浅間嶽面影草紙』の主題と何らかかわりがないので、これを序としたことに合理的説明を付ける必要があった。しかし、種彦の述べた理由はあまりに必然性に欠けるものであることは否定できない。」とされ、種彦は自らの考証を披露したいが為にこの場を利用したといわれている。^(二四)種彦は京伝同様に考証を趣味としてしばしば作品に取り入れており、戯作を考証披露の場としていたことは確かであろう。しかし、このように直接内容に関係するものではないが作品から連想された歌を載せて序とし、考証癖を発揮してそれについて説明してみせるといふ形自体は、京伝が『昔話稲妻表紙』(文化三年)の冒頭に「東山八景」「香づくし」という二つの小歌を載せて、

右東山八景、香尽二曲は、むかし室町に花の御所をいとなまれし頃、京童のうたひし小歌となむ。その

ちかはるか過て、堺の僧高三隆達といふ者、ふしはかせをあらためかえてうたひしより、なべて隆達ふしといふとぞ、此草紙の時代に因あるをもてこゝにしるしつ。

と説明している形をそのまま踏襲していると考えられる。

口絵三丁才の「巴之丞側女時鳥」の絵は、貴賤の違いはあるものの、醜くなった顔、枕の位置、片膝を立てた体、ついたて(屏風)の位置など『梅花水裂』(文化四年)三丁前ウ三丁後才の「棧藻の花が死霊の為に奇病をわづらひ、容兒金魚のごとくに変じてくるしむ。積悪のむくい、天罰おそるべし。」という挿絵の棧の姿に似通っている。周知のように挿絵には作者の指示が大きく関与しており、特に種彦に関しては下絵の精密さも指摘されている。^(二五)こゝも種彦の指示により描かれたと見るべきであろう。

前編第一の星影土右衛門から侍女さつきへの艶書

去る頃よりかずおほく玉章を寄せぬれど、ふつに答なきおもむきにて、人知らず袖は涙に朽なんと、阿武隈川の埋木にたとへ、空しく門に待ちあかしぬるは、立くされする錦木に比し、狭布の細布胸あはずとも、一夜のなさけかけてよと強ちにかきくどきたる消息なれば…(傍線筆者)

は、『善知安方忠義伝』（文化三年）の

かくひめおきて阿武隈川のうちれ木とし、錦木のた

ちなからくちむを見むは、いとをしむべし。（中略）

そはとまれかくまれ、狭布のほそぬのむねあはぬ人

と、いはれむも：（傍線筆者）

という東北の縁語を尽くした序と同様の趣向と思われる。

前編第七で、巴之丞の本妻瞿麥は時鳥に嫉妬し自らの屋敷に呼び寄せる。時鳥が「惶々左右の光景を見る」と、贅を尽くした美しい部屋に瞿麥がおり、「自ら時鳥が手を取り」琴を弾くよう強要し恥辱を与える。この場面は、

○時鳥の被虐の状は淨瑠璃『妹背山婦女庭訓』のお三輪との関係が考えられ……

○侍女時鳥の殿中にて責めさいなまれ、嘲弄されるくだりが、妹背山のお三輪から来たのは云ふまでもない。（一七）

というように、従来『妹背山婦女庭訓』より得たとされてきた。藤原淡海と橘姫の祝言を聞き嫉妬したお三輪がかけつけたところ、橘姫の局たちが大勢で取りかこみ、無理に酌をとらせ歌を強要するという場面である。確かに多くの侍女たちが愚弄し、歌を歌わせるという形は類似しているが、その嘲弄に橘姫は直接関係しておらず、

お三輪の死にも姫は関わっていない。入鹿をほろぼす方法、「爪黒の鹿の血汐と、疑着の相ある生血是を混じて此笛に濯ぎかけて調」べ「心をとらかす」という目的のために忠臣金輪五郎今國が殺害し、お三輪も淡海のためと納得して死んでいくのである。二〇この場合女の争いが中心に描かれているのではない。『桜姫全伝曙草紙』（文化二年）巻之一に、鷲尾十郎左衛門義治の本妻野分の方が妾玉琴の寵愛厚きをねたみ、自らの屋敷につれて来させ、玉琴が「おそるくく見る」と、美しい調度品で飾られた部屋に野分の方がおり、「玉琴が手をとらへ」琴を弾くように責め立てるといふ場面がある。本妻の嫉妬、美殿の様子、琴を強要するあたりは酷似しており、『妹背山婦女庭訓』以上の一致がみられる。この場は『曙草紙』の玉琴被虐の場面をもとにして、『妹背山婦女庭訓』のお三輪の影を取り入れて作られたと見るべきであろう。

後編第二で、時鳥に飲ませる毒薬を調合した鈍玄に瞿麥が賞金を与え「此方の小逕より疾々と往ね」と一旦帰らせると見せて、悪事の露見を防ぐため自ら斬りつけて殺害するという場面は、『曙草紙』巻之一で野分の方が玉琴をさらって来た兵藤太に賞金の金子を与え、「とくくかへりて休息せよ」と帰すふりをし、彼が油断した所を斬り殺すという場と同様の趣向である。

後編第四で、瞿麥が侍女たちと琴の演奏を楽しもうとした時、時鳥の怨霊により様々な怪異がおこり瞿麥らが苦しむ場面は、『曙草紙』巻之五で桜姫の琴の音にひかれた玉琴の霊が現れ、桜姫を苦しめて野分の方に復讐する場の影響を受けていると思われ、怪異の細かい内容、描写も次表の如く似通っている。

『面影草紙』	『曙草紙』
○みよく今におもひし らさん	○見よく近きに汝をとり殺し、ともに捺落に率てゆかん、思ひしるべし
○瞿麥懐劍抜きはなし、はつしと切しが、是も両團の鬼火となり、葩をくぐりて飛出でけり。	○枕刀を抜てはたと斬に、忽一団の青火となりて消失：
○障子をさらくとひらくを(中略)いつのまにやらん侍女にうち交、二人の女童あり。	○障子さとあくる音す。(中略)館のうちに見なれぬ美しききり禿二人：
○かやくと打笑ふ声きこへ、家鳴することおびたゞし	○毎夜震動家鳴し(中略)家の棟に高笑するなどさまぐの怪あり

同条で、瞿麥に時鳥の霊がとりついて瞿麥の悪事を語るといふ場面も、『曙草紙』の同巻で玉琴の霊が桜姫にとりつき、野分の方の悪事をすべて暴露するという場と同様である。

後編第五で巴之丞が逢州への愛におぼれる場で、巴之丞自ら「彼唐の玄宗皇帝、華清宮にありて、楊貴妃を寵愛せしも、我宴樂にはおよぶまじ」と言っている。先述のように後編が「一名 本朝長恨哥」と称されていることから、本作に玄宗、楊貴妃の影を負わせていることは確かである。巴之丞は「只管酒宴遊樂にのみあかしくら」し、忠臣彌総太が諫言するのを怒り、逢州らが「御短慮に候」と止めるのを聞かず斬ろうとするところ、時鳥の鳴く声を聞いて「酒氣忽地にさめて、ありし事は悉夢のごとく」改心する。『善知安方忠義伝』巻之三上冊で頼信が「佚遊宴樂にのみあかしくらし」ており、忠臣藤六左近輔相が「伝聞唐の玄宗皇帝、楊貴妃を愛し、驪山の花清宮にありて、姪酒に耽り：」のように玄宗などを頼信に重ね合わせて諫言するが、頼信はかえって怒り、左右になみ居たる美女らが「こは御短慮」と止めるのを振り切り、藤六を斬る。そのとき黄蝶があまた集まり群がり飛ぶのを見て、頼信は「忽迷雲はれて胸月かゞやき、本心に立かへりて夢の醒たるごとく」になり改心する。さらに、『面影草紙』で彌総太が巴之丞の放埒を止めな

かった一子小織之助に「かばかりの事思ひあきらめざる
汝にてはなかりしに、一定天魔のみいれしにやあらん」
と怒るが、これは『善知安方忠義伝』の、藤六が頼信に
「是等のごとき理を、御辨なき君にてはなかりしが、か
ならず天魔の見入たるならん」と諷める言葉に近似して
いる。この巴之丞放埒のエピソードは後の展開に何ら影
響がなく、「浅間物」で巴之丞が逢州に入れあげるとい
う設定をふくらませて用いたに過ぎないのだが、具体的
には『善知安方忠義伝』の頼信放埒の場より得て描かれ
ていると見ることができよう。

後編第九で、逢州の袿に時鳥の霊が宿り、瞿麥への恨
みを語り、迷い成仏できずにいることをなげくところ、
老僧が教化し、句をとなえながら「手に持念珠ふりあげ
て、袿を丁度うち給」うと時鳥が成仏するという場面は、
『曙草紙』巻之五で玉琴の霊が桜姫にとりつき、一体二
形となり野分の方への恨みを語るところ、常照阿闍梨が
教化し、句をとなえ、数珠をもって打つことにより成仏
するという『雨月物語』の「青頭巾」をふまえた場面に
一致する。

同条で、時鳥が成仏し逢州の袿の袂から桜花一輪こぼ
れたのを老僧が持つて去り、後に寄居虫の持つ観音がそ
の桜花を手にしていたことから、老僧が観音の化身であ
ったと知る。成仏した女が桜の花を残すという形は『曙

草紙』巻之五の末尾で成仏した桜姫が伴宗雄に桜の一枝
を残すという場に通ずる。

以上のように、本作にも多く京伝作品との趣向の一致
が見られるのである。

さらにここでもう一点、挿絵に対する意識について確
認しておく。

前編第八に、「後編発端」として

此末瞿麥時鳥を殺し、時鳥の怨鬼瞿麥を苦しむるこ
とわけは、既に書はてつれど、劊腕師の工未だなら
ず、書房しきりに発兌のときをいそげば、後編にゆ
づりぬ。圖ありて言葉なきをうたがひ給ふことなか
れ。後へん発兌のときを待て、首尾まつたきを見給
ふべし

と書かれ、後編で語られる時鳥殺害の場と怨霊が瞿麥を
苦しめる場の挿絵四図が前編に入れられている。不備の
まま前編が刊行されてしまったといえるが、奇しくも同
年に出された京伝の『浮牡丹全伝』にも同じことがおこ
っている。巻之四末に

此神史全部九冊なれども、著述遅滞して、発兌の時
におくるゝにより、書肆且づ四冊を刻し、前帙とな
して発兌せんことを乞ふ。これによりて俄に連印鈕
號第四回の條を作りかへて、彫刻の時に迫りぬれば、

繪を施に暇あらず、第五卷目に記せる事の繪を此に出せり。俠者釣船三撫夜中孤兒を救ふ圖、水草が魂魄魚籃に還着する圖、飛驒の國籃渡の圖、村婦闇羅殿にて現前呵責にあふ圖、都て其事は第五卷目第八卷目にあり。後帙発行の時を俟得て見るべし。

とかかれ、その後編はついに刊行されなかつた。『近世物之本江戸作者部類』^二に京伝と馬琴の読本について唐来三和の説として次のような言が載せられている。

文化年間唐来三和その友の為に京伝馬琴の戯作を批して云京伝は冊子の画組とよく機を取ることに妙を得たり。されは臭草紙はさら也よみ本といへとも先ツさし画より腹稿して後に文を綴るといへり。こゝをもてうち見は殊におもしろからんと思はざるものなけれどもよくよみ見れは見おとりのせらるゝ多かり。（中略）又馬琴は臭草紙よみ本共に趣向と文を旨として画組と思ひつきに骨を折らす。こゝをもて稿本成らされは画稿に及はずといへり。この故にうち見はさまておもしろからしと思ふもの多かれともよくよみ見れは感賞せざることなし。

京伝は馬琴と異なり、挿絵を本文に先行させたというのである。これに関して大高洋司氏は『本朝醉菩提全伝』（文化六年）でも口絵や挿絵と作品本文との間に不一致がおこっていることを指摘した上で、「複雑に絡み合っ

た内容をもつ読本においては、挿絵に合わせて本文を綴つて行く、などというのは、やはり無謀以外の何者でもない」とされ、三和の言のように常に挿絵を本文に先行させる読本作りをしていた訳ではなく、「元来の「遅吟遲筆」のため、結果的にこのようになってしまったのだろうと述べられている。^{三〇}

では、種彦はどうだろうか。前編第七に入れられた「瞿麥の方深夜に時鳥をなぶり殺しになす」（一二丁ウ一三丁才）という挿絵で、時鳥は悪瘡のための醜い顔で描かれている。ところが出版された後編では、時鳥が鈍玄の知らせた解毒の方法で平癒し、もとの顔色になったことを知って、瞿麥が殺したという形をとっている。つまり殺されたとき、時鳥はもとの美しい姿になっていたはずである。このような挿絵と本文との齟齬がおこっていることからして、前編発兌の時点で本当にこの段を「既に書はて」ていたかどうかは疑問である。

本作の執筆状況について、内村和至氏の詳細な論者が備わる。^{三一}

刊本の付言に

文化五年戊辰夏六月、一二ノ巻書果シ、同冬十月
草稿完クヲハル

とあるが、日記でもこれが確認される。文化五年六月五日に第一巻、六月十五日に第二巻、を各々改め

て出したという記事がある。(中略)八月十八日から『面影草紙』第三巻に着手、八月二十九日以降記事が途切れ、突然十月十三日に至って「浅間書き果る」と記されている。

『面影草紙』の起筆は明らかでないから第一巻については何ともいえないが、第二巻は十日前後で二十丁ほど書いた計算になり、第三巻は同じ程度の分量に二カ月弱かかったことになる。(中略)八月二十三日から二十八日まで日付のみを続け書きにして「ねてくらす」とあつて、当時二十六歳の種彦がかなり病弱であつたことを窺わせている。そのため第三巻は病気による中断のために長引いたものかと想像される。

元来病弱であつた種彦は、この三巻を執筆するころ特に体調がおもわしくなく、そのために原稿が遅れ、本来、巴之丞都へ出立の後、すぐに瞿麥の時鳥殺害、怨霊譚をいれるつもりであつたが間に合わず、急速後編の発端である巴之丞と逢州の出会いを入れて三巻として発兌したという想像が可能となる。このような事情のため、後編の始めに巴之丞と逢州の話が語られ、時鳥の霊があらわれてその死を知らされた後、時間軸をさかのぼって時鳥殺害と怨霊の復讐の場が描かれ、「作者種彦伏告」として

此一條は巴之丞、皇都におもむきしあとに、却て陸奥なる館の事を説きいづれば、一の巻にいへる花街一の説話よりは前なり。前後二編を合てみ給ふときは、前編第八回、巴之丞再度皇都に旅だつといふところに、此條を次いで、同じく下冊後編発端を除き、後巻一の巻を読給ふべし。譬ふるも鳥澁のわざなれど、源語に堅行横行あるが如し。此巻半までは、時鳥存命のうちなり。夫心得て看給ひね。

のように苦しいともとれる説明をつけなければならぬ。ような、極めて不自然な形をとつてしまったといえよう。偶然の一致ではあるが、理由に違いがあるにせよ京伝同様「遅吟遅筆」であつたがゆえに結果的に絵が先行してしまつたと考えられる。

挿絵を本文に先行させ、それにあわせて本文を綴つたということはしないにしても、京伝が挿絵を重視していたことは周知のことであるが、同様のことが種彦にもいえる。

星影土右衛門は浅間家を追放された後、団一斎を殺害し金を奪う。ところがこの時点で、一斎を襲つたのは「曲者」と書かれるのみで土右衛門が犯人とは本文上全く記されていない。次に彼が登場する前編第五でも「星影土右衛門は、奥州を追放たれてより、下総常陸を横行なし、さまざまの姦悪を行ひ……」と書かれているが、一斎殺し

については明かされていない。それにもかかわらず、読者が早々に一斎殺害の犯人が土右衛門だと知るの、この場(前編第一)に対応する挿絵(二一丁ウ二二丁オ)とその絵に添えられた「土右衛門隠形の術をもつて一斎を殺し金をうばふ」という詞書きのためである。これを単なる種彦の失敗と片付けるのではなく、挿絵にも物語の一部として重要な情報を語らせているものと考えたい。また前編第三で、一斎の遺児である二人の娘の孝をたたえ、「近郷の農夫其子の不孝なるを誠むるには、まづ彼等が身上をかたりいで、姉妹の孝順を詠りたる曲子につゞり苗植るのおりはかならずこれを唄ひけるが、其歌は今もなを村翁の唇上にありとなん、事は画上にあり」とし、二人の孝女の様子を描いた挿絵(二丁ウ二丁オ)の横に姉妹の至孝をうたつたという田植歌をのせている。先述のように種彦は下絵にもこだわりをもっており、少なくとも馬琴のように挿絵は本文の添え物という考えではなく、本文の一部として重要視し、多くを語らせていたことは確かであろう。

三 『曙草紙』との関係

『面影草紙』には京伝作品から得たと思われる部分が多く見られる。その中で特に大きく影響を受けているのは、時鳥譚である。瞿麥が時鳥に琴を弾くように強要し恥辱を与える場面にはじまり、瞿麥の鈍玄殺害、時鳥怨霊による家内の変異、老僧の教化と時鳥成仏、残された桜の花というように、時鳥譚の大筋は『曙草紙』の野分の方と玉琴のエピソードに一致する。第一章で述べたように、巴之丞に関する物語は逢州と時鳥という姉妹を中心とする二つの話に分けられるが、逢州譚は「浅間物」演劇より、時鳥譚は『曙草紙』より材を得て作られたと見なすことができるであろう。

種彦の文政十二年十月二十八日付笠亭仙果宛書簡に
よみ本ハ京伝の桜姫がかきふりよきやうにおほえ申
候同人の作にても稲妻表紙ハおとり候やうに見え申
候しかし今ハ曲亭のかきふりをまなひ候かたか徳な
るへし小子か今かき候へハ桜姫のおもむきへ今すこ
し漢字者文章をくはへ申候

とある。^(三)佐藤悟氏が指摘されているように、^(三)京伝の読本、特に『曙草紙』を良いとしている。時代の嗜好は馬琴の読本に傾いていることを認識し門弟の仙果にはそれを真似たほうが「徳」としながらも、種彦自身は京伝の読本の方を高く評価しているのである。文政十二年は種彦が合巻『修紫田舎源氏』初編を刊行した年であ

り、最後の読本を刊行してから十六年も経っている。読本の筆を断ち、合巻作者として確固たる地位を得たこの時点においてさえも、(京伝流)読本への思いは捨て切っていなかったようである。京伝作品の存在が種彦という作家にとつて大きく、しかも長く意識され続けていたといえるであろう。『曙草紙』を高く評価した種彦は、実際に『面影草紙』著述においても、この作品を参考にし、直接的に内容を摂取して著していたことが確認できるのである。

『面影草紙』に先駆けて出版された『奴の小まん』(文化四年)が『曙草紙』の影響を受けていることについては、後藤丹治氏、^(三三)木越俊介氏^(三五)により詳細な論考が備わっているが、この作品の悪女唐衣も野分の方より得て造形されている。このように、種彦は『曙草紙』の野分の方を元にして二度も自作の人物を造形しており、良いとしている『曙草紙』の中でも、特に好んでいたのは野分の方という悪女の造形ではなからうか。

『奴の小まん』の唐衣は「すぐれて美麗」である上に、もとは「やさしき」人物であったのが、老狐の恨みによつて「男とみればしたひよりたはれことをいひかけ」るという浮気な性となつてしまふのだが、徐々にその狐の呪いを越えた悪事を犯していく。まず妾の横雲殺害に用

いる毒薬を得るため医師を殺害し、侍女たちには彼に襲われそうになつたのだと偽る。「おろく／＼こゑにてものかたり、かたへをむきて舌をはき、ことなりたりとよろこびけり」というように、悪人としての大胆さまで見られる。後に横雲殺害の陰謀が露見しそうになる場面などでは幾度も「肝ふとき女なれば」と表現され、また「唐衣はあはれみの心なき、むまれゆえ」とも書かれ、老狐の呪いの「浮気な性」の範囲を越え、まるで生来の性質が(悪)であつたかのように描かれているのである。そして、ついに旅人を殺し金を奪う賊首となり、その悪業を見かねた娘の小まんが諫言したところ、

類いまれなるあくとうなれば、小まんがいへることを用いざるのみか、心におもふは、しよせん、この小まんを活おかば、わがあしてまとひとなりて、心のまゝに盗そくもなしがたし
と考へ、
いつそだましようちにかれをころし、のちのさはりを
まぬかれん

と、自分の娘までも殺そうとする大悪人になっているのである。『曙草紙』の野分の方は「絶世の美人にて、翠黛紅顔の粧、花よりもなほ靨、玉簪照月の姿、あたりも輝ばかり」の美女である。彼女は妾玉琴をなぶり殺しにし、賊蝦蟇丸の妻となつて先妻小萩を殺害させ、先妻の

子松虫鈴虫姉妹をいじめ抜く残忍の人物でありながら、自分の娘に対しては「子を憐むこと世の人に越て厚く、強悪の志には露ばかりも似ざ」る性質をもっていた。だからこそ、玉琴の怨霊は桜姫を苦しめることによって、彼女を深く愛する母親の野分の方に復讐するのである。何度も「子をいつくしむ」性であることが強調され、佐藤深雪氏によって指摘されているように、^{三〇}この性質は野分の方に意識的に与えられ、また物語上重要な意味をもっている。『奴の小まん』の唐衣は野分の方の影響を強く受けて造形されているものの、先掲のように実の娘の小まんを「あしてまとひ」と考え、「だましようちにかれをころ」そうとしている。剛胆な悪党として描かれる二人の女性はこの点が異っているのであるが、この違いは決して小さいものではない。種彦は野分の方から唐衣の形象を得ながら、〈善〉の部分である「子をいつくしむ」性をそぎおとし、〈悪〉の部分をも特に強調して造形したといえよう。『面影草紙』の瞿麥も「花も妬み月も恨む美人」であるが、唐衣と同様に〈善〉の部分は描かれず、徹底的な〈悪〉の人物として描かれている。このようなことから、種彦が特に注目していたのは野分の方のような高貴で美しい女性の犯す残酷な〈悪〉であったと考えられる。

『面影草紙』の瞿麥は、『曙草紙』の野分の方から形

象を得、善性を消して徹底的な〈悪〉として描き、より残酷性を加えて造形されている。そして、それに対する怨霊の復讐も『曙草紙』より得て、残酷性、怪異性をさらに強調している。こういった残酷な場面は、先掲の追遥の「惨憺たる光景を、種彦得意の凄絶なる筆にて敘せるあたり、鬼氣の人に逼るを感じしむ」という言葉にもあるように、後に高く評価されている点でもある。種彦は京伝から様々な影響を受けながら、中でも、『曙草紙』にある高貴な美女の残忍な悪事とそれに対する怨霊の復讐という対立を好み、その残酷性をさらに強調することによって自己のものとし、一つの見所を作り上げたといえるであろう。

四 種彦読本における女性

『曙草紙』巻之三で信太平太夫勝岡と蝦蟇丸によって鷲尾義治が殺害され、屋敷を焼かれ、鷲尾家が滅ぼされるが、この部分はいくく簡単に記されるのみであり、またこれに対する仇討も、

弥陀二郎篠村と心を合せ、田鳥造酒丞を始として、こゝかしこにかくれ住て仇家をうかゞふ同志の義士等をかたらひ、平太夫を打て亡君に手向はやと相議しける所に、三木之助伴宗雄も舅の仇をむくい、家

を再興すべきくはだてありと聞、宗雄を仇打の主とし、篠村公光・弥陀二郎・造酒丞を始として、(中略)その余宗雄が家士三人・篠村が妻山吹・同家僕

藤六等・都合十八人、信田が家に乱入して、つひに平太夫を打取、首を義春の靈前に手向て追善を修し、というだけで、鷺尾家の御家としての問題は解決してしまっているのである。大高洋司氏は『曙草紙』評として

野分の方、玉琴、桜姫にそれぞれ振り分けられた嫉妬、怨念、恋情といった感情は、理屈を越えた、女性一般に通有のものとして、読者を共感に導くのである。この作品が文学的に優れているのは、こうした女性特有の感情を生のまま、他の尤もらしい意味づけを全く付与せずを中心に据え、物語の展開の原動力としたからである、と思う。

と述べ、鷺尾家の物語が淡泊に描かれていることについてもこのためとし、

なぜならば、このストーリーを強く全面に押し出すうとすると、女性の感情を軸とした展開から話が遠くなつて、京伝の意図とは離れてしまうからとされている。また、

清玄をはじめとして『曙草紙』の男主人公たり得ている登場人物がひとりも見当らないのも、同じ理由に拠ると考えて差し支えないように思われる。

ともいわれており、^(三七)これらの見解については全面的に賛意を表したい。『曙草紙』の見所は、こういった女性達の描かれ方にあるのである。

一方、同じ京伝の作でも『稲妻表紙』では異なっている。不破道犬は「浜名入道に内通して媚諂、管領の権威をかりて、奸計を施し、佐々木の家を奪ひ、浜名の味方につかん」という目的をもち、「いかにもして桂之助を失ひ、実子花形丸を、家督にせまほし」と思う蜘蛛の方と共謀して佐々木家の後継桂之助らを陥れる。父と同じく反逆を企む不破伴左衛門は恨みを抱く佐々木家の忠臣名古屋山三郎と対立する。その遺恨も、山三郎が主君桂之助の命令でやむをえず伴左衛門を草履打ちをしたことが始まりであった。また、桂之助は放蕩がつのり佐々木家を勘当となつて流浪し、武道つれく草という秘書を得た功と梅津嘉門らのとりなしにより帰参する。佐々木三八郎は御家への忠義のために、白拍子の藤波を殺害し、罪の報いで様々な艱難辛苦がある。その三八郎の子供楓は御家の重宝百蟹の巻物を買ひ戻す金のために身を売り、文弥は「忠義の為」に月若の身代わりとなつて死す。このように、ほとんどの事件が佐々木家という御家の問題で統括されており、佐々木家に関係する男たちを中心に物語が展開されている。^(三八)本作にも『曙草紙』同様、悪の高貴な女性蜘蛛の方が登場するものの、彼女の残虐

行為は実子の花形丸に家督を継がせたいという思いからのものであり、悪の動機として御家の跡目争いをを用いている。本作は、女性達の感情はあまり強調されることなく、物語中で中心となることもない。『稻妻表紙』はこの点で『曙草紙』とは大きく異なるのである。

さて、種彦の『面影草紙』はどうだろうか。巴之丞は浅間家の当主という立場を負っているながら、御家物の要素は本作の中にほとんど感じられず、巴之丞が逢州に入ればあがる場でも、『稻妻表紙』の桂之助のようにその放埒が〈御家〉として問題になることもない。^{三〇}唯一、〈忠〉が感じられる五郎蔵とさつきが主君の為に逢州を請け出そうとする場も、結局さつきが土右衛門に寝返ったと誤解した五郎蔵が、さつきと誤って逢州を殺害してしまい、五郎蔵は罪を悔いて自害し、さつきも夫のため共に死ぬ。忠義は全うされず、事件は五郎蔵の私的な感情にとりこまれてしまっている。本作において御家や忠義はあまり意味をもっていないといえよう。また、『面影草紙』は「敵討物作品」といわれているが、^{三一}確かに土右衛門への仇討譚の発端と結末が最初と最後に配置されているものの、これにかかわるのは限られた人々であり、「敵討物」といえるような一話を統括するような力はもっていないのである。御家、敵討のような一話の流れを規定するような枠組は強調されてはいない。そう

いった本作の中で主軸をなしているのは、瞿麥、時鳥、逢州、さつきといった女性達の「嫉妬、怨念、恋情」といった「女性一般に通用」の感情ではなからうか。嫉妬からの瞿麥の時鳥虐待やそれに対する時鳥の怨念、逢州の巴之丞との恋、さつきの五郎蔵への恋慕の情などのように、女性の感情こそが主に物語の直接的な原動力となっている。一方、巴之丞など男性についてはあまり詳しく描かれることなく、重要な位置を占めてはいない。また、物語の展開に関係するものだけでなく、女性の感情の描写は小さな場面においても非常に有効に使われている。例えば後編第二の逢州と時鳥の霊の出会いの場でも、お互いに実の姉妹と聞かされても信じることができず、そのうえ、互いの美しい姿に嫉妬の心をおこし、ののしり合う。巴之丞に二人の顔の相似を指摘され、鏡をのそいたところ、時鳥が指櫛を落とし、二人の幼いころの思い出がよみがえって、本当の姉妹と気づき喜ぶ合うというところは、実に見事に女性の感情が描かれているといえ、離れ離れに過ごした姉妹の再会という場を盛り上げている。『面影草紙』は『曙草紙』同様、「尤もらしい意味づけ」を用いず、生の「女性特有の感情」を中心として描き、「物語の展開の原動力」としているのである。

ここであらためて種彦の読本作品を見てみると、敵討

や御家騒動のような枠組を強調しそれによって物語を展開させているのは、『総角物語』（文化五年）と、試作的に作り自ら「読本浄るり」と名付けた『勢田橋竜女本地』（文化八年）の二作のみであり、さらに『面影草紙』同様、女性を中心に描いたものが多いことに気がつく。

『霜夜星』は、実録物『四谷雜談』をもととした怪談物であるが、悪霊の恐ろしさだけでなく、醜女でありながら心美しい女性であるお沢が、裏切られ、殺され、その恨みからついには怨霊に身を落とした悲しさが描かれている。お沢は最後にかつては恨んだお花に弔いを頼んで成仏する。他にお花と津島という二人の女性が登場しているが、お花は夫や子供の死、津島は「良人にひとしき求君」の死という悲劇にあり、ともに尼となる。二人は光明寺で念仏に専念し、同年同日同時に大往生し、中凹になった鉦鼓は後に鉦鼓観音として拜まれた。最後に付けられた付け足しのような部分であるが、これも一つの重要な意味をもっており、悲しみを経て最終的に二人が救済されたことが窺われる。本作は怪異を語るだけでなく、三人の女性の悲しみと救済が一つのモチーフとして使われた作品といえるであろう。そして、お沢の怨念、お花と津島の恋情が物語展開の要点となっているのである。

『奴の小まん』の前編は、唐衣を中心として話が進む。

老狐の呪いによって悪心がおこり、嫉妬から妾の横雲を殺そうとし、様々な悪事を犯して賊首となり、あげくに自らが殺した男の息子に仇討されるというように、唐衣という悪女が前半の物語を動かしている。後編では唐衣の娘の小まんが中心となる。小まんなは母とは反対に（善）の女性として描かれ、しのおとの恋愛、敵討、道行、出家など、彼女の人生を通して物語を展開させている。これは、善悪双方に描き分けられた母娘を主軸として作り上げられた物語である。

『阿波之鳴門』（文化四年）の十郎兵衛は、『傾城阿波の鳴門』^{三〇}など、演劇で知られた人物であるが、種彦が冒頭で、

彼の阿波の鳴門と題號せし浄瑠璃本に十郎兵衛といへる者あり。主君の為に千辛万苦して遂にその志をとげしごとく書きなせしは實ににくむべきの盜賊なり。

と記しているように、阿波十郎兵衛は実説では盜賊であると主張し、本作では一般的に忠臣として知られた十郎兵衛を実説にもとづいた悪役として脚色している。また、畠山多門は弓子を助ける英雄的な存在であるものの、物語途中で殺害されてしまうというように、中心的役割を果たす男性は存在しない。結局この物語の大半を占めているのは女性である弓子の行動である。『傾城阿波の鳴

門』が典拠であることは題名からも明らかなのだが、主に基づいているのは巡礼唄の段である。おつるの口をふさいだ為に誤って殺してしまうという形も、せりふもそのまま取り入れているが、彼女を殺害した人物を十郎兵衛から母親の弓子に変えている。多門との出会いと幸福な生活という（陽）の場、かどわかされ花街に売られた後の鹽木による虐待、夫の死、再会した娘をその手で殺してしまう悲劇、おつるは靈薬により蘇生したものの、敵である十郎兵衛に身をまかせたことへの後悔からの自害、霊となっておつるに付き添い復讐という（陰）の場というように、弓子の人生を通して対立的な二つの場面が描かれ、主に弓子の行動を通して物語が展開してゆく。『傾城阿波の鳴門』で十郎兵衛の妻という存在にすぎなかった弓子を物語の中心に据えているのである。

『線手摺昔木偶』（文化十年）では、菖蒲や薫といった女性の他に、吉三の存在も重要な位置を占めている。ただ、巻一の発端で、主君頼政公のため華々しく討ち死にする渡辺競と六浦などの極めて男性的な物語が語られているにもかかわらず、これが後において直接的に関係するのは、その戦で競の臣佐吾七（黒丸）に討たれた千寿太郎の一子水泡信夫之助（水雄丸）の靈魂が、薫との間にできた息子信夫にのりうつって佐吾七に仇をかえすという話のみであり、全体を統括してはいない。本話

でも吉三と菖蒲、信夫之助と薫、吉三と薫の恋愛譚などを中心として世話物的な物語が描かれており、物語全体の方向を決め、登場人物の行動を理由付けするような大きな枠組でつつんでしまうことなく、人間的な感情を自由に表現しているといえる。

『面影草紙』を含め以上のように見てみると、種彦の読本では御家や敵討など武家的な内容や男性を主人公とした話よりも、女性を中心として、特に女性に通用する感情、心の変化を主軸として作り上げた物語が多いことがわかる。種彦が高く評価し自作に趣向を多く取り入れた『曙草紙』は、先述したように「尤もらしい意味づけ」なしに女性をそのまま描き、それを物語展開の原動力としている。彼がその『曙草紙』の中でも野分の方のエピソードを好んでいたことは明白であり、『曙草紙』の生き生きと感情が描かれた女性たちの魅力にいち早く気づき、自作でもこれと同じ方法を取り、（御家）などのような男性的な物語に取り込んでしまうことなく女性を中心とした物語を著作したということも推察され得るのではないだろうか。女性の嫉妬、怨念、恋情という感情をそのままに事件の動機として物語を構成してゆく方法は、種彦読本の多くに共通する一つの特徴となっている。このような点においても、種彦の読本は京伝流の読本、特に『曙草紙』の形と非常に近い位置にあると考えられ

るのである。

おわりに

『面影草紙』も処女作同様、京伝作品より大きく影響を受けて作られている。それも無作為に趣向を取り入れるのではなく、『曙草紙』の中でも野分の方のエピソードを好み、その余分な物をそぎおとし、さらに得意の残酷性に富んだ筆致をもって人物を造形した。また、『曙草紙』と同じく、物語を大きな枠組に取り込むことなく、女性の感情をそのままに描き、それによって物語を動かしていった。女性を中心として物語を作り上げるのは、本作のみならず多くの種彦読本に共通する特徴と位置付けられよう。

種彦が京伝作品のどこに特に魅力を感じ自らの作品にとり入れたのか、その一端をこの『面影草紙』により窺い知ることができるのである。

〈注〉

(一) 拙稿「種彦読本と京伝」(「国語国文」第六十九巻第五号、2000)

(二) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店)『浅間嶽面影草紙』の項(鈴木重三氏)

(三) 前編は第一〜第八の八条、後編は第一〜第十の十条を収める。

(四) 前掲(二)

(五) 一例をあげれば、「唯忘れがたきは互の恋路、恋しゆかしにもゆるなる、胸の煙をくらべなば浅間の山も数ならず」という逢州のせりふは、『其佛浅間嶽』の「云はでこがる、胸の火の煙くらべん浅間山」「只忘れぬは互の恋路」から得たと思われる。

(六) 泉鏡花「舊文学と怪談」明治四十二年十二月(『鏡花全集』巻二十八、岩波書店、1942)

(七) 坪内逍遙『浅間嶽面影草紙』解題(『絵入文庫』第十七巻、絵入文庫刊行会、1917)

(八) 前掲(二)

(九) 曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』(木村三四吾編、八木書店、1988)

(一〇) 『柳亭日記』(古典叢書第十三巻『柳亭種彦集』II、本邦書籍株式会社、1990)

文化五、六年中の僅かに残されている日記中、「浦島太郎倭物語作者為永太郎兵衛、車違合戦櫻作者文耕堂、義太夫本二冊かりる」のように、義太夫本を読んだという記述が多みられる。

(一一) 『柳亭浄瑠璃本目録』(『未刊随筆百種』一八、臨川書店、1969)、『種彦古浄瑠璃本目録』『初代柳亭蔵書目録』

- 『近世書目集』、日本古典文学会、1989) など。
- (一) 菱川師宣画『姿絵百人一首』(『日本風俗図絵』第二輯、日本風俗図絵刊行会、1914)
- 寄居虫の姿は「伊勢」より得ている。小織の介の姿は全く同じものは確認できないが、衣装や刀、座った姿勢が「参議等」に描かれた絵に近いと思われる。
- (一三) 小野恭靖「柳亭種彦の歌謡研究—考証随筆及び戯作の中に見える歌謡記事に注目して—」(大阪教育大学紀要(人文科学) 四十五巻二号、1997)
- (一四) 前掲(一三)
- (一五) 伊狩章『柳亭種彦』(吉川弘文館、1965)
- (一六) 笹川種郎『柳亭種彦集』解題(近代日本文学大系一九、1926)
- (一七) 前掲(一六)
- (一八) 『浄瑠璃名作集 下』(日本名著全集、1929)
- (一九) 前掲(九)
- (二〇) 大高洋司『本朝酔菩提』の再検討(「読本研究」第四輯上套、1990)
- (二一) 内村和至「種彦合巻の創作基盤とその基本的構成について」(『近世文学論叢』、明治書院、1992)
- (二二) 佐藤悟「種彦書簡集」(『近世文学俯瞰』、汲古書院、1997)
- (二三) 佐藤悟「柳亭種彦の『南総里見八犬伝』評について」(「読本研究」第七輯上套、1993)
- (二四) 後藤丹治「読本三種考證」(『国語国文』八巻四号、1938)
- (二五) 木越俊介「情花奇語 奴の小まん」と京伝・馬琴」(『国文学研究ノート』三二号、1997)
- (二六) 佐藤深雪「校姫全伝曙草紙」論—江戸小説と子安の民俗信仰—(『文学』五一巻八号、1983)
- (二七) 大高洋司「『優曇華物語』と『曙草紙』の間—京伝と馬琴—」(『読本研究』第二輯上套、1988)
- (二八) 『曙草紙』と異なり、『稻妻表紙』が(御家物)の枠組みに包括されているということに関しては、大高洋司氏も「京伝と馬琴—文化三、四年刊の読本における構成の差違について」(『読本研究』第三輯上套、1989) でふれられている。また、京伝と人気を二分した馬琴の同時期の作品は枠組みが強調されていることをあげ、京伝の読本との差異を明らかにされている。
- (二九) 本作のもとになっている「浅間物」では、巴之丞は「傾城に戯れしゆへ、親の勘当を受け」ている。(新日本古典文学大系『上方歌舞伎集』、1998)
- (三〇) 前掲(二)
- (三一) 「傾城阿波之鳴門」(続帝国文庫『近松半二全集』、1899)

◎『浅間嶽面影草紙』は学習院大学蔵本（国文学研究資料館マイクロフィルム）、天理大学蔵本、『絵入文庫』第一七巻より、『逢州執着譚』は京都大学文学部閲覧室蔵本より引用した。

その他の種彦作品は、『近世怪談霜夜星』（国立国会図書館蔵）、『情花奇語奴の小まん』（京都大学附属図書館蔵）、『総角物語』（国立国会図書館蔵）、『緞手摺昔木偶』（京都大学附属

図書館蔵）、『勢田橋竜女本地』（京都大学附属図書館蔵）、『柳亭種彦集』（近代日本文学大系一九）を用いた。

京伝作品については『山東京伝全集』（ペリカン社）を用いた。

（ほんだ あかり・博士後期課程）